

特集 「国語の力」を考える

—「読むこと」「書くこと」があぶない—

国語の重要性はだれもが認めるところです。しかし、新学習指導要領では国語の授業時数が大幅に削減されています。このような厳しい環境の中で必要な国語の力をどのようにして子どもたちにつけていくことができるのか、現場の先生にもご参加いただき、考えてみたいと思います。



「国語」で培うべき力

—「読む・書く」ことの大切さ—

京都大学名誉教授 渡辺 実 わたなべ みのる

国語教育の世界で、「聞くこと」「話すこと」の大切さが言われ始めて、すでにかかなりの時がたつ。人間が言葉に託した重要な機能の一つが「伝達」であることに疑いはないから、「聞く・話す」が重んじられること自体は、歓迎すべきことである。特に日本人の伝達能力が欧米人のそれに比べて低いというのであれば、もっと早くから対策を講じるべきだったということにもなる。ディベートなどという討論の訓練が欧米では実施されて、自分の考えを主張する能

力が養われるのに、そもそも相手を言い負かすことに日本人は熱心でなく、外国人との意見交換ではとかく受け身になりがちである。これには日本人の英会話能力の弱さも加わっているわけ、英会話能力の向上と「聞く・話す」伝達能力の向上とが、相乗的にその必要を意識させ、言語における伝達能力の重要度が、急速に高まる気運となったものと思われる。

だが人間が言葉に託した機能に「認識」といつ、極めて重要な機能があることを忘れてはならない。国語教育の用語で言えば「読むこと」「書くこと」がそれで、「読む・書く」の重要さが忘れられてはならないということである。国語教育における「読む・書く」ことの大切さは昔から十分に自覚されてきているし、「読み・書き」こそが国語教育の中核だとされてきたようにさえ思われるのだが、「聞く・話す」の今日的抬頭たいてうのありを、「読む・書く」が受ける危険性があることは否定できず、そんなことが起こらないよう、警戒を強める必要があると思われる。

そもそも「聞く・話す」、すなわち話し言葉は、目の前の聞き手に理解され「読解りようかいされること」で完結する構造のものである。だからこそ、聞き手に理解されやすいよう、聞き手の言語能力の程度、考え方や感じ方の傾向などを探りながら言葉を選んで話を進め、逆にこちらが聞き手にまわる時は、相手の思考や感情の動き方に注意しながら聞き取るという、はなはだおもしろくて難しい作業に身を置くことになるのだけれども、そういう高度な作業を含めて、話し言葉が本質的に、その都度その都度の場面の状況（聞き手は、状況のもっとも重要なものである。）に依存することは否定できない。「伝達の言語」とは、場面状況に規制され、聞き手に向かって開かれた緩い構造のものである。

これに対して「認識の言葉」、すなわち「読むこと」「書くこと」では、目の前の聞き手などは存在せず、こちらを規制する場面状況というものが存しない。「読むこと」「書くこと」にも幅があつて、携帯電話でおしゃべりをメールに送るなどのことがあるけれども、これは話し言葉の変種にすぎない。まっとうに「読む・書く」「書き言葉は、一人で言葉と向き合つ、孤独な

「国語」で培うべき力

精神活動に身を置く言葉なのである。聞き手や状況に合わせるおもしろさの替わりに、言葉と取り組むことだけが要求される厳しさが待ちかまえている、そついつ世界なのである。「認識の言語」とは「伝達の言語」のように誰かに向かって開かれた言語ではない。読み手なり書き手なり、一人の人間の内部で閉じられた構造をもった言語である。読まれるべき言葉が読み手の中で、書かれるべき言葉が書き手の中で、これはこういう内容を備えた言葉なのだ、これはこういう内容を表す言葉なのだ、見定められることで完結する言語なのである。

聞き手に向かって開かれた「聞く・話す」と、自分の中で閉じられた「読む・書く」と、どちらが人にとって大切であるつか。どちらも大切だが、大切さの質に違いはあるまいか。「聞く・話す」ことの大切さは、われわれが他人と交わって社会生活をスムーズにかつ多彩に送ることに結びつく大切さである。「読む・書く」ことの大切さは、われわれが自分の思考や感情をより精密により潤沢に磨きあげることに結びつく大切さである。一人一人の個性にとっては、自分の思考・感情をより豊かにすることが、一段と重要なものではあるまいか。そもそも社会生活を多彩に送る言語能力というそのこと自体が、一人一人の思考・感情がしっかりと言語に結びついた形で生かされて初めて可能となるものであることを思ふべきである。英会話に上達したところで、自分の思考・自分の感情をしっかりと備えていない限り、ディベートに参加すること也不可能な道理である。国語教育における「読むこと」「書くこと」が、「聞くこと」「話すこと」重視のありで、たとえ配当時間数の削減という物理的な形であろうとも、犠牲とされるような愚挙はあってはならないことを言をまためと思われる。

このように重要な「読み・書き」教育において、なされることの内実はどういうものであるうか。そのことを考えるために、一人の小児を仮定する。彼（または彼女、以下同じ）が一匹のワンワンとほえる動物を見るとしよう。彼の母親は「あれはイヌよ。」と教えるであろう。見たり聞いたり感じたりすることの一切を「経験」と呼ぶならば、彼は一つの経験をし、その経

験を「イヌ」という言葉で言い表されるのが社会習慣であることを教わったのである。彼はその後多くの犬を見るであろう。その都度その都度見る犬は、さまざまの点で相互に違いをもち、一匹として同じものは存しない。それら「経験」としては同一でない多くが、同じ「イヌ」という一つの「言葉」で表されるのは、両者の間に橋のようなものがあって、それが両者をしっかりと結びつけているからである。この橋渡しするものが「意味」と呼ばれるものである。小児のみならず、われわれはこの「意味」の橋を渡って、「経験」と「言葉」との間を間断なく往復する。「経験」から「言葉」へ行くこと、それが「表現（書くこと）」であり、「言葉」から「経験」へ行くこと、それが「理解（読むこと）」にほかならない。

国語教育が「読むこと」「書くこと」において教えているものは、「経験」と「言葉」と「意味」との、三位一体の定着である。そして「意味」というものが「経験」と「言葉」との媒体である以上、「意味」は「言葉」のものであると同時に「経験」のものでもあるのだ。ところが大切どころである「意味」を教えることは、「経験の意味」を教えることでもあるのだ。そこが大切なところであって、国語教育は「言葉」を教えることで、「経験」の中身、すなわち事物だけでなく思考や感情の中身を教えているのである。児童生徒が一つの「言葉」、例えば「ナツカシイ」という「言葉」を教わる時、彼は「なつかしい」という感情がどういう「経験」であるかを諒解する。だから「言葉」を多く身につけている者は、それだけ多くの「経験」を諒知した、思考感情の豊かな者と言つことができる。「イヌ」はどうということはないが、「ナツカシイ」「モッタイナイ」「コマカス」「ケイベツスル」などになると、国語教育は人間教育の色彩を濃くしてくる。これが、物事を教える他教科と国語科との大きな違いである。文部行政は、国語科をも他教科と横ならびに位置づけようとするが、これは国語教育の不幸にほかならないと私には思われる。そしてこの不幸に国語教育の現場が気づいていないとすれば、それはさらに深刻な不幸と言つべきであろう。